

# 産業革命前夜における中産層の役割

——デフォールとスマイスを中心に——

山 口 正 春

- 一 はじめに
- 二 中産層の台頭と階級の流動化
- 三 中産層とビューリタニズム
- 四 デフォールの中産層の評価
- 五 スマイスの中産層の評価
- 六 結びにかえて

一七世紀後半から一八世紀半ば前後の時期いわば産業革命前夜の時期は、全体として見れば、中世を支配してきた教会権力に対する「人間的反抗の時代」であつたし、また封建的諸特権に対する「理性の抵抗の時代」であつたといえるだろう。<sup>①</sup>別の視点から見れば、この時期はまた、中産層が次第に台頭してきて、彼らの力と言動が無視できなくなつた時代であつた。と同時に、あらゆるものが徐々に世俗化されてきて、経済的な目で眺められた時代でもあつた。<sup>②</sup>新しい社会層である中産層の台頭とその社会的地位の上昇、これがこの時代の顕著な社会的現象であつたことは特記されてよいだろう。換言すれば、中産層が封建社会以来の特権階級であつた地主、貴族、教会人、宮廷人、貿易商人などの旧支配権力に対して、急速にその発言力を増し、社会的影響力をもちはじめた時代であつたのである。ところで新興の中産層の立場に立つて、彼らに目を向け、その役割に期待をかけた人物にダニエル・デフォーがいる。この中産の人々こそ、イギリスの繁栄を支える最強の支柱であると彼は信じていた。<sup>③</sup>デフォーは『イギリス経済の構図』の中で、他国に比べてイギリスでは中産層が非常に繁栄していることを高く評価し、この中産層こそが今イギリスの国富をその双肩に担っている中堅グループなのだと考えていた。当時イギリスは、すでにヨーロッパの他の列強を抑えて、まさに七つの海に制覇を成し遂げつつあつたが、その原動力はほかならぬ中産層の繁栄であり、そしてこの中産層の繁栄によってイギリス経済のさらに輝かしい将来がもたらされると考えていた。<sup>④</sup>事実、一八世紀半ば前後から本格化する産業革命で、イギリスは「世界の工場」として君臨し、それによって世界的な制覇を完全なものにするわけであるが、その産業革命の原動力になつた人々の中堅グループもまた、中産層の中から出てくることになる。

デフォォーは中産層の立場に立ち、ものを言っていたが、もちろんデフォォー以外にも、当時中産層の立場に立つ人は数多くいたはずである。しかし彼ほど透徹した史眼をもって、当時のイギリス経済の繁栄と中産層の役割との関連を見極めた人はごく稀であろう。こうしたデフォォーの中産層の役割への評価は、やがてアダム・スミスに連なっていくという意味で、はなはだ重要である。スミスも中産層に目を向け、産業革命という経済発展の基盤となったものが、中産層に由来し、そうしたものがイギリス産業革命を準備したのだと高く評価したのである。

ではデフォォーやスミスが産業革命を準備したと高く評価したものの、つまり中産層の属性、具体的に言えば、中産層のもつ宗教倫理、徳性、価値観や思考、さらに中産層の日々の生活態度、行動様式などは、一体如何なるものであったのだろうか。また中産層の属性は、上層および下層の階級の属性と比較して、どのような点に特徴があるのであるのか。さらに経済論の視点から、彼らが中産層を評価した理由は、どんな点にあったのであろうか。<sup>⑦</sup>

小論では、こうした点を主としてデフォォーの『ロビンソン・クルーソー漂流記』、『イギリス経済の構図』、スミスの『道徳感情論』、『国富論』を取り上げ、紙幅の許す限り、明らかにしたいと思う。

(1) 大河内一男『アダム・スミス』(『人類の知的遺産』42)、講談社、昭和五四年、四一三頁。

(2) 中産層に関しては、研究者によってさまざまな中産層理解がある。ここでは、一応、上流の貴族・ジェントリー・地主層が土地所有とそこからあがる地代収入に基礎を置いているのに対して、中産層は土地所有ではなく、専門職を含むとはいえず、主として商工業にその基礎を置く階層であって、被雇用者としての職人や労働者とは明らかに区別される社会層としておこう。尚、関口尚志「中産層文化とデフォォーの世界」、道重一郎「イギリス中産層の形成と消費文化」(関口尚志・梅津順一・道重一郎『中産層文化と近代―ダニエル・デフォォーの世界から―』日本経済評論社、一九九九年、所収)をみよ。中産層は、ミッド

ル・クラス、中産階級、中産市民層、中産身分層などと、さまざまな呼び名で言われている。

- (3) 野沢敏治「スミスにおける教育と学問」(上)『経済科学』××Ⅲ―2、名古屋大学経済学部、三一頁をみよ。
- (4) デフォー『イギリス経済の構図』(山下幸夫・天川潤次郎訳)、東京大学出版会、一九七五年、解説、四一〇頁。
- (5) 大塚久雄『社会科学における人間』岩波新書、二〇〇〇年、三七頁。
- (6) 留意すべきことは、イギリスの「産業革命は、国会から経済的援助の風を送ってもらわなくても、自力で邁進した。だが、忘れてはならないのは、高い関税障壁が国内産業に長い間息つく暇を与えたことである。流動資本と利潤の両方が直接課税を免れていた。資本は自由に運用されたのである。」(Roy Porter, *English Society in the Eighteenth Century* (Revised Edition), 1982. ロイ・ポーター『イングリランド18世紀の社会』(目羅公和訳)、法政大学出版局、一九九六年、四六六頁。
- (7) 佐伯宣親『産業革命の思想と文化』成文堂、平成三年をみよ。
- (8) Cf. E. Royston Pike, *Human Documents of Adam Smith's Time*, 1974, pp. 187-216.

## 二 中産層の台頭と階級の流動化

産業革命前夜における著しい社会的現象は、中産層の台頭とその社会的地位の上昇、つまり封建社会以来の特権階層に対して、中産層が急速にその発言力を増し、社会的影響力をもちはじめたことである。そしてこの中産層は、前述のように、上流階層とも労働者層とも区別され、「資本の充用と労働者の雇用」ならびに「蓄積と向上」を本質的特徴とする、主として商工業にその基礎を置く新興の社会層であった。<sup>(1)(2)</sup>

他方、これとは対照的に、上流階層の一角を占める貴族・ジェントリー層がその経済的没落と窮乏を深め、彼らが生き延びるため中産層との金力目当ての政略結婚をしたり、貴族やジェントリーの地位を売買したりして、その没落

を食い止めようとさまざまな妥協を試みた時代であった。デフォォーは、この辺の事情を『イギリス経済の構図』の中で数多く述べている。いくつかを引用しよう。この時期における階層の流動化の一端がよく分かるであろう。

「われわれは、今や貴族や古くからのジェントリーが、ほとんどあらゆるところで、彼らの所領を売り払い、庶民や商工業者らがそれらを買取ったのを知っている。その結果、ジェントリーは今や貴族より豊かであり、さらにまた商工業者らは、彼らすべてよりもさらに豊かである。」<sup>(3)</sup>

「商工業者はジェントルメンになれないと彼らは言うけれども、しかもなお、商工業者は今日、この王国のほとんどすべての地方で、ジェントルメンの資格を買取ることができ。」<sup>(4)</sup>

「贅沢と高級な生活により、土地財産を浪費し消尽したために、その家運が衰え、衰微してしまった古い家柄が、他方では富み栄えてはいるが息子がなく、そのために財産を女系の孫に残さざるをえなくなったような商工業者の娘と縁組し、侮られていた商工業者と血を交えることによって再び回復し、立直っている〔数多くの例がある〕。」<sup>(5)</sup>

このようにして「貴族および地主層の衰微した土地財産が回復され、またその家族の傷がより豊かな商工業者の娘によって癒されたように、他方では商工業者自身の手によって、あるいは彼らの息子たちの援助をえて、地主層の中の多くの家族がその身分を全く失うほどに没落し、貧しさと困窮にうちひしがれていたときに、彼らはその氣力を回復することができた。」<sup>(6)</sup>

「商工業は一言でいえば、古い家々が没落し、衰退したときこれを引き上げる。そして古い家々が失われ、消滅したところに新しい家を植えつける。」<sup>(7)</sup>

「家運の傾きつつあるジェントリーは、彼らの身代が失われてゆくのを見て、しばしばその息子たちを商工業界へと

押し出してやる。そして、彼らは、次に息子たちの努力により、しばしばその家の身代を回復する。このようにして、  
 商工業者はジェントルメンとなり、ジェントルメンは商工業者となる。」<sup>(8)</sup>

こうした引用文から分かるように、この時期、上流の貴族層と中産層の間で階級間の移動が、それぞれの事情や思  
 惑などで、かなり頻繁に行われていたことが明らかになるのである。<sup>(9)</sup>

ところで注目すべきことは、中産の市民層にとつての交流の場は「コーヒーハウス」であつたことだ。彼らはコー  
 ヒーハウスに集合し、社交し、固有の文化を創り出したのである。上層の特権階級の人々がもつばら「茶」を社交の  
 用具に使用していたのに対して、中産の市民層は好んで「コーヒー」を飲み、コーヒーハウスに集合した。ではコー  
 ヒーハウスとは、具体的には如何なる場所であつたのであろうか。

コーヒーハウスとは一杯一ペニーのコーヒーを飲みながら、人々があらゆる種類の話題について論じあい、語り  
 あつた情報センターのことであり、暇つぶしの場のことであり、反政府陰謀の震源地であり、商品や株の取引所で、  
 はたまた新思想の醸成の場でもあつた。<sup>(10)</sup> その上、コーヒーハウスは新聞・週刊誌などのジャーナリズムを生み、小説  
 という文学の大ジャンルと文筆をもつて生計をたてる人々のサークル、すなわち文壇を生み、さらには王立学士院を  
 も育んだのである。<sup>(11)</sup> 一八世紀初期には、二千軒以上のコーヒーハウスがロンドンにあつたと言われている。<sup>(12)</sup> 上田辰之  
 助は「コーヒーハウスの繁盛とミドルクラスの勃興とは、切り離しては考えられない」と書いている。<sup>(13)</sup>

さらにつけ加えれば、市民たちは自分の行きつけの店をもつていたという。しかも市民の日課に組み込まれていた  
 のである。たとえば訪問客などは、決まった時間に彼のなじみの店へ行けば必ずというほど当人に会うことができた。  
 何でも、連中は出掛けに「誰かが訪ねて来たら、例のコーヒーハウスに行っているからね」と徒弟に言い渡していく

のを常としていたらしい<sup>14</sup>。上流の特権階級が「茶」の会を中心に怠惰で非生産的な時間の浪費をやっているのに対して、中産の市民層は、上述のようにコーヒーハウスに集合してコーヒーを飲み、評論を行ない、知見を広め、商品や株の取引をしたのである<sup>15</sup>。

以上述べてきたところから明らかなように、この時期、上流の特権階級が依然社会的に優位であったとはいえ、中産層との格差は一七世紀後半以来かなり縮まってきていた。大地主や貴族の中にも、商工業に従事する者が出現し、中産の市民層と手を結び、その結果、中産層も肩書きを得て、下院に議席を占めるようになり、社会的地位を向上させるに至ったのである。今や中産層は一団となって社会的・経済的發展を遂げ、独自の文化を創り出したのであり、それに役立ったのが、上述のコーヒーハウスの流行であったと言えるであろう。

では、この中産層のもつ日常生活における宗教倫理、徳性、思考、さらに彼らの生活態度、ライフスタイルなどは、一体、如何なるものであったのであろうか。次にそれを見よう。

- (1) 関口尚志、前掲論文、三三頁。
- (2) Daniel Defoe, *A Plan of the English Commerce, being a Compleat Prospect of the Trade of this Nation, as well the Home Trade as the Foreign*, Second Edition, 1730, Reprints of Economic Classics, 1967, p.50. 邦訳、六〇頁。
- (3) *Ibid.*, p.81. 邦訳、八六頁。
- (4) *Ibid.*, p.81. 邦訳、八六頁。
- (5) *Ibid.*, pp.81-2. 邦訳、八六頁。
- (6) *Ibid.*, p.83. 邦訳、八八頁。

- (7) *Ibid.*, pp.12-3. 邦訳、二八—九頁。
- (8) 「娘に持参金をたっぷりつければ、貧乏貴族の若い息子を網に捕らえて自分の娘と結婚させることも可能になる。それがジェントルマンの息子と商人の娘との縁組み、土地持ちが金持ちを抱き込む、「当世風結婚」であった」とロイ・ポーターは記している。(ロイ・ポーター、前掲訳書、七四—五頁。)
- (9) 角山栄・村岡健次・川北稔『産業革命と民衆』(『生活の世界歴史10』)、河出書房新社、一九九二年、九五—六頁。
- (10) 同書、九六頁。
- (11) 上田辰之助『蜂の寓話―自由主義経済の根底にあるもの―』(『上田辰之助著作集4』)、みすず書房、一九八七年、六八頁。
- (12) 同書、六八頁。
- (13) 落合幸二『ロビンソン・クルソーの世界』彩流社、一九八四年、二四二頁。
- (14) アダム・スミスの会、大河内一男編『アダム・スミスの味』東京大学出版会、一九六五年、一四八頁。
- (15) 櫻庭信之『イギリスの小説と絵画』大修館書店、一九八三年、一五四頁。

### 三 中産層とピューリタニズム

中世ヨーロッパでは旧教であるカトリックの教義が社会の隅々まで侵透しており、人々の思考、慣習、生活態度を規定していたことは周知のところである。この伝統的な中世ヨーロッパの社会においては、営利の追求、利潤の動機など経済生活の領域は、道徳的には卑しいと考えられていた。<sup>1)</sup>

ところが一六世紀にルターやカルヴァンによって展開された宗教改革の結果、旧教のカトリックの教義と制度が否定され、これに代って人々に新しい教義と新しい積極的な生活態度が示された。そこでは中世カトリック的禁欲主義

のように日常生活から逃避し、離脱することで神に接近するのではなく、世俗の内部で日常生活を聖化し、神に接近することが唱えられた。世俗的活動はプロテスタンティズムによってはじめて認められるようになったのである。

人は俗世間から逃避するのではなくて、俗世間の中であって、神に仕えるために俗世間に置かれていると言われ、これはそれまで奨励されていたカトリックの教義、すなわち現世的なものからの隔絶・逃避の教義と相反するものであった。さらに日常生活における勤勞と節約こそが、すべての人のなしうる最高の禁欲であり、無為と休息と奢侈こそが神授の使命・天職に背く宗教的悪徳であると考えられた。プロテスタンティズムは、さまざまな人間が織りなす日常の現世的活動を是認した。しかしそれは欲望の解放を通じてではなく、むしろその逆の「世俗内的禁欲」を通じてであった。自分の職業を神の「お召し」(calling)と聖化して考え、その職業(天職)に忠実に、禁欲的に尽くすことによって神に奉仕するのが人間の使命であると考えられた。<sup>②</sup>この禁欲的プロテスタントの職業倫理が近代資本主義を準備したと言われることについては、マックス・ウェーバーが名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(以下、「精神」と略記)の中で詳細に語ったところである。<sup>③</sup>このプロテスタンティズムの教義が、イギリスの中産層に多大の影響を与えたのである。

さて『精神』の中でウェーバーは、リチャード・バクスターの宗教観がイギリスの中産階級の経済倫理に与えた影響の大きさについて述べている。

まずウェーバーによって「ピューリタニズムの道德神学のもつとも包括的な綱要」と言われたバクスターの『キリスト教指針』(以下、「指針」と略記)は、一貫して怠惰を戒め、真面目に働くことを説いている。すなわち「直接神への礼拝を行っていないときには、自分の合法的な職業(コーリング)である仕事(ビジネス)に専念するように努めね

ばならない。「自分の天職（コーリング）である勤労にはげみなさい。」「あなた方はそれぞれ絶え間なく働くべき職業（コーリング）をもっており、その働きを止めることが許されるのは直接神に礼拝をしているときだけで、ということを知らねばならない。」<sup>(5)</sup>と。また「労働と勤勉は精神を合法的な仕事に向け、それ故、多くの危険な誘惑から遠ざけ、虚飾と罪から守ります」<sup>(6)</sup>とも説いている。このようにバクスターの『指針』には、間断のないきびしい労働への教えが繰り返し返し、時には激情的なまでに、一貫して説かれている。

また以下のように、時間の浪費をせぬように忠告している。「常に時間を大切にし、毎日自分の時間をなくさぬようにもつと注意すれば、あなた方は自分の金銀をなくさぬようになるでしょう。無駄な気晴らしや衣服、御馳走、無駄話、無益な交友、それに睡眠などのどれかが、あなた方に誘惑となつて時間を奪いそうになったら、よくよく注意しなさい。」<sup>(7)</sup>この引用文には、「時は金（カネ）なり」というベンジャミン・フランクリンのものとして知られる格言を想起させるものがある。フランクリンの格言は、バクスターの時間に関する指針の世俗化と見ることができ<sup>(8)</sup>。

バクスターの『指針』によつて「貧しいことを願うのは、……神の栄光を害するものであり、……神にいつそう喜ばれるような天職を、つまり、いつそう多くを利得しうるような有益な職業」<sup>(9)</sup>を選ぶのが義務とされた。「神のためにあなた方が労働し、富裕になるというのはよいことなのだ。」<sup>(10)</sup>バクスターにとつて営利活動と信仰とは互いに相容れないものではなく、両者は自然に一致するものであつた。<sup>(11)</sup>

バクスターの教えを受け容れていたピューリタン（清教徒）<sup>(12)</sup>たちは、自分の職業を天職と考え、怠惰を戒めて勤勉に働いたのである。と同時に、彼らにとつて勤勉、節約、慎慮といった新しい徳性が強調されたのである。ピューリタンには、浪費や奢侈は害悪であり、節約を心がけ、不正を行わず、日々、正直な生活を実践することが求められた。

この宗教倫理上の教えは、やがて節約を實行し勤勉で規律ある経済人の育成に貢献したのである。ウェーバーは言う。「こうして、ピューリタニズムの倫理観は近代の経済人の揺籃を守ったのだ」と。この点がピューリタニズム（清教主義）が、中産層の市民に与えた影響の重要な点であろう。<sup>14</sup>

さらにウェーバーによれば、ピューリタニズムが後に与えた影響の今一つの重要な点は、「ピューリタニズムの人生観は、……どのような場合にも、市民的な、経済的に合理的な、生活態度へ向かおうとする傾向に対して有利に作用した」ことである。「ピューリタニズムの担うエートスは、合理的・市民的な経営と労働の合理的組織のそれだった。」このエートスは、主として商工業に基礎をおき、労働者を雇用して商品生産を行ない利潤の極大化を追求する、ピューリタンの中産層ないしミドルクラス出身の近代的企業家によって推進された。この近代的企業家は、「徹底して国家的特権の上に立つ商人・問屋・植民地的資本主義に対する激烈な反対者となったのだ」と。「こうして——イギリスにおいては、国家的特権の上に立つ独占企業が、まもなくすべて消滅してしまうのにひきかえ——ピューリタニズムの創造した心理的起動力は、政府の権力にたよらない、部分的には、むしろそれに抵抗して生まれつつあった産業に、決定的な助力を与えることになった。」<sup>15</sup> 上述のことから、中産層出身の近代的企業家の経済人としての目覚めが、実は当時のピューリタニズムの倫理観とうまく融合していたことが分かるであろう。

ピューリタニズムと経済を融合したこの新しい人間像つまり経済人は、当時の中産層の特質であつて、いわばピューリタンの中産層は、資本主義精神の担い手であつて、やがて世間の信頼をも得て、イギリス社会の主流をなすのである。この点をトニーは、以下のように的を射た言葉で述べている。すなわち「清教主義の旗手となつたのは、どこでもこうした中産階級の人々であつた。」<sup>16</sup>「清教主義は、英国の中産階級の教師であつた」と。

- (1) 梅津順一『近代経済人の宗教的根源』みすず書房、一九八九年、二〇〇頁。
- (2) 安藤英治『マックス・ウェーバー』（『人類の知的遺産』62）講談社、昭和五四年、二一八―二四四頁をみよ。
- (3) 安藤英治編『ウェーバー プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』有斐閣新書、一九九五年をみよ。
- (4) Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd.1, 1920, S.164. (以下「GAZRS」と略記) マックス・ウェーバー『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳）岩波文庫（ワイド版）、一九九一年、二九〇頁。
- (5) GAZRS, S.169. 邦訳、三〇一頁。
- (6) 梅津順一『ピューリタン牧師バクスター―教会改革と社会形成―』教文館、二〇〇五年、二六七頁。
- (7) GAZRS, S.168. 邦訳、二九七―八頁。
- (8) 梅津順一『ピューリタン牧師バクスター』、一〇九―一〇頁。
- (9) GAZRS, S.176. 邦訳、三二〇―一頁。
- (10) GAZRS, S.175. 邦訳、三二〇頁。
- (11) 日本において、これと同じような思想は、たとえば曹洞宗の禅僧、鈴木正三（一五七九―一六五五）の『万民徳用』の中に見出すことができる。『万民徳用』の特色は、「世法則仏法」の倫理思想を展開したことである。つまり現世の生活の中に仏道修行を実現しようとする。そして正三は、現世の職業生活が仏教と矛盾しないのではなく、仏教そのものであるとした。換言すれば、現実生活における職業労働の実践のうちに仏教の本質があるという。（芹川博通『いまなぜ東洋の経済倫理か―仏教・儒教・石門心学に聞く―』北樹出版、二〇〇五年 五七頁。）
- (12) ピューリタンとはイギリスのカルヴァン派をいう。世俗の職業を重視し、禁欲や勤勉を説き、絶対王政の支柱であったイギリス国教会派や特権をもつ大商人と対立を深めた。尚、ピューリタンはさらに、組合派（会衆派）、長老派、バプテスト、クエーカーなどの宗派に分かれた。

(註) GAZRS, S.195. 邦訳、三五一頁。

- (14) 天川潤次郎・寺本益英『社会経済史講義』学文社、二〇〇四年、四六―七頁。
- (15) GAZRS, S.195. 邦訳、三五〇―一頁。
- (16) GAZRS, S.186. 邦訳、三二〇頁。
- (17) GAZRS, S.201. 邦訳、三六一頁。
- (18) GAZRS, S.201. 邦訳、三六一頁。
- (19) Richard Henry Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism: A Historical Study*, with A Prefatory Note by Dr. Chales Gore, Pelican Books, 1948, p.202. トーニー『宗教と資本主義の興隆』(出口勇藏・越智武臣訳 岩波書店) (下) 一九九三年、一〇〇―一頁。

#### 四 デフォーの中産層の評価

前述のように、バクスターにとって営利活動と信仰とは互いに相容れないものではなく、両者は自然に一致するものであった。そして神のために労働し、富裕になることは善であった。ピューリタンであったデフォーは、このバクスターの教義を継承しているが、これこそピューリタンの経済観の神髄なのである。やがてピューリタンの中産層なし彼ら出身の近代的企业家(経済人)を通じてなされる営利活動Ⅱ「財産(富)への道」が、そのまま「徳性への道」につながるものであると認識されるに至る。旧教の支配する封建社会では、経済人としての行動は、むしろ蔑視すべき人間行動だと見なされていたことは、先に述べたところである。その上、上層の特権階級は奢侈や放蕩のために、一方下層階級は貧困のために、「徳性への道」を行うことは難しいと考えられていた。したがって双方にとって「財産への道」が、そのまま「徳性への道」につながることはありえないと考えられたのだ。

デフォーは『ロビンソン・クルーソー漂流記』の中で、こうした諸階層の人間像を鋭い洞察力をもって見抜いている。ここでは、デフォーは資本主義の精神の担い手としての中産層に対する賛美の言葉とともに、上層および下層の両階級の陥り易い悪徳について述べていることが注目せられる。『漂流記』をデフォーが出版した頃、外国貿易にはまだ多分に一か八かの冒險的な要素が残存していて、乾坤一擲の投機的性格が強かったのである。ところがロビンソン自身も、そういう冒險をやつてみたい。自分も兄と同様、貿易商人として海外で活躍したいと目論んでいた<sup>②</sup>。それを察知した父親は、以下のように言つて止める。

「運を賭して外国に行つて一旗揚げ、尋常一様でない仕事をやつて名前をあげようなんていう連中は、どん底生活に喘いでいるような連中か、さもなければ、ひどく野心的な金と運に恵まれた連中か、そのどちらかなのだ。こういうことは、お前などの手の届くことでもないし、またそこまで身を落してやるまでもないことなのだ。」<sup>③</sup>

さらに父親は言葉を続け、「お前の身分は中位の身分で、いわば下層社会の上の部にいるというわけなのだ。自分の長年の経験によると、この位いい身分はないし、人間の幸福にも一番びつたりあつてもいる。身分のいやしい連中の惨めさや苦しさ、血のにじむような辛酸をなめる必要もない。身分の高い連中につきものの驕りや贅沢や野心や妬みに悩まれる必要もない。こういう身分がどんなに幸福なものか、ほかの連中がどれ程羨ましがっているかということを考えてだけでも分かりそうなものだ。偉い地位に生まれたばかりに昔からどれ程多くの王様がその悲しみを味わつてきたことか。二つの極端の、つまり貴賤の中間に生まれてきていたら、と願つてきたことか。貧も富も避けたいと願つた賢者は、中位の身分こそ本当の幸福の基準であることを証したということができ<sup>④</sup>る」と説得する。

この引用文には、人間についての豊かで細やかな観察に基礎を置いた多くの人間的眞実が見られないであろうか。

さらに父親は、中産層への贊美の言葉が続ける。

「中位の生活は實際、あらゆる美德、あらゆる楽しみの源泉といえる。このちようど頃合いの暮らしには、いわば平和と豊かさという侍女がかしづいている。また、ここには、さまざまな祝福がある。たとえば、節制や中庸や平靜や健康や社交が、また、あらゆるこちよい娛樂、あらゆる望ましい楽しみがある。こうやってこそ、人間は靜かに穩やかに世間を渡つてゆき、また楽しく世を去つてゆくことができる。」<sup>(5)</sup> 引用文に見られるように、中産層のみが、さまざまな祝福を享受し、安らかな生活を営みながら靜かに世の中を渡つていくことができるという。ピューリタンとしてのデフォアの人生訓が如実に語られている。<sup>(6)</sup>

またデフォアによれば經濟的視點、つまり消費購買力の視點からも、中産層は地主・貴族などの上流階級よりもすぐれていると言う。デフォアは中産層、ミドルクラスの健全な消費を強調するとともに重視し、富裕な上流層の惡徳に由来する浪費に著しく批判的であつた。したがつて彼にあつては、産業活動は富裕な上層階級の惡徳に由来する浪費に依存して發展すると考えたマンデヴィルの經濟認識には批判的であり、一方中産階級と広汎な勤勞者階級の堅実な消費こそ産業發展を支える主要な要因であると主張したハチソンの立場に組するものである。デフォアもハチソンも大衆的国内市場に対する確信に立ち、上流層の奢侈に頼らぬ經濟建設を自然で現實的なイギリスの姿と考へた。<sup>(7)</sup>

デフォアはそれ故、一部の中産層の中に、富裕な上流層のように「見せよう見られよう」とする模倣、という空虚で低俗きわまる思い上がりに熱中して耳をかさない風潮があることを自省を込めて批判し、そうした浪費と虚栄は道徳を腐敗させるとともに、商工業者の破滅への近道だと警告したのだ。商工業者は、本来、上流層と教育や価値体系を異にしている。職業生活には「勤勉と節約」が必要で、「怠惰と浪費」に特徴づけられている上流層の行動を見習う

のは困難であり、危険ですらある、こうデフォォーは考えていた。<sup>(8)</sup> デフォォーはまた、上流の富裕層の奢侈や浪費が国内経済の産業構造を歪め、国際収支を悪化させることを厳しく指摘した。上流の富裕層の破滅的な愚行に依存する不自然で信用できない新産業がはびこり、奢侈品の輸入で貿易収支が赤字になって、健全な国民経済の繁栄とその支柱である国民的製造工業が損われると言うのである。

このような観点からもデフォォーは、中産層が上位の社会層の生活様式を模倣して有害な奢侈に感染することを強く懸念し戒めていたのである。だからデフォォーにとって、消費とはあくまでも勤労と節約の延長線上に位置する、中産の市民層と広く勤労大衆の健全な消費行動（大衆的国内市場）を基本とするものであった。中産層の「勤勉による利得」とともに勤労大衆（労働者層）の「購買力としての賃金」を重視するデフォォーの大衆的消費市場論は、彼の『イギリス経済の構図』の中に見ることができるといえる。

「二つの階層、つまり製造業者と店主の……労働、ないしは取引上の勤勉によって得られた彼らの利得と、そしてまた信じ難いほどの彼らの数によつてこそ、われわれ自身の産物と、また当地に輸入された他国民による産物の国内消費は並はずれて大きいのであるし、またわれわれの取引は、……驚くべき大きさにまで達しているのだ。……彼らはよく食べ、十分に飲む。彼らの食事、(つまり)肉類について言えば、たとえば牛肉や羊肉、またベーコンなどの消費は、彼らの生活環境に応じて気前がよく、それは極端というよりは、むしろ浪費的ですからある。」<sup>(9)</sup>

イギリス国民の生活水準は、ヨーロッパ諸国の中でも断トツであった。デフォォーによれば、イギリスの国民は「中産の身分で商工業に従事し、かなりよい暮らしをしている勤勉な国民なので、彼らの暮らし向きのよさが、国内の生産品と同様、外国品の巨大な消費に対しても機会を与えているからである。こうしたことは、世界のいかなる国もこ

れに匹敵するものがない。<sup>(10)(11)</sup>」

このような生活水準の高さは、中産層のみに限られず、勤労大衆（労働者層）においても、そうなのである。彼らの生活水準の高さは、具体的には賃金の高さによって表現されるとし、次のように述べている。労働者層の暮らし向きが良くて「彼らは温かいところで休み、豊かに暮らし、激しく働き、そして欠乏を知らず（また知る必要もない）。……あなた方の消費の大半を引き受けるのは、まさにこの人々なのである。……彼らの賃金によって彼らは豊かな暮らしができ、また彼らの贅沢な上に大まかで、自由なびのびとした生活が、われわれ自身の産物と同様、外国の産物の消費をこのような大きさにまで引き上げた。<sup>(12)</sup>」

悪徳に陥り易い富裕層と貧困層に批判的である一方、さまざまな祝福を享受し、安らかな生活を営みながら静かに世間を渡っていくことができる中産層を高く買ったデフォォー、そして富裕層の奢侈的消費に著しく批判的であるが、中産層の商工業者と勤労大衆の堅実な消費に基礎を置いた大衆的消費市場を重視したデフォォー、こうしたデフォォーの見解は、のちにアダム・スミスに継承されることになる。次にそれを見よう。

- (1) 天川潤次郎「一八世紀初頭の社会経済倫理の起源―デフォォーの著作について―」『経済学論究』第一七卷第一号、関西学院大学経済学研究会をみよ。
- (2) 大塚久雄『社会科学における人間』岩波新書、二〇〇〇年、三四頁。
- (3) Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, introduction by Guy N. Pocock, M.A. Everyman's Library, 1966, p.5. デフォォー『ロビンソン・クルーソー』（平井正穂訳）、(上)、岩波文庫、一九九四年、一二頁。
- (4) *Ibid.*, pp.5-6. 邦訳、一二―三頁。

- (5) *Ibid.*, p.6. 邦訳、一三三頁。
- (6) 天川潤次郎「産業革命前夜における経済倫理の継承と展開」『社会経済史学』4・5、有斐閣をみよ。
- (7) 関口尚志、前掲論文、五九—六〇頁。
- (8) 同論文、四〇頁。
- (9) Daniel Defoe, *A Plan of the English Commerce*, p.101. 邦訳、一〇二—三頁。
- (10) *Ibid.*, p.79. 邦訳、八四頁。
- (11) ジョサイア・タッカーは、家庭用備品や装飾品に対する消費需要の旺盛さについて述べている。イングランド人は「オランダを別にすれば、ヨーロッパのどこの国に見られるよりも、家の中により便利な設備を有し、清潔で品のよい家具の数をさらに増やそうとし、絨緞、衝立、窓のカーテン、家内用呼びりん、磨かれた真鍮製錠前、炉格子など——外国の同じ身分の人々の間ではほとんど知られていない物——の種類を豊富にしようとする。」(ロイ・ポーター、前掲訳書、四六六頁。)
- (12) Daniel Defoe, *A Plan of the English Commerce*, pp.101-2. 邦訳、一〇三—四頁。

## 五 スミスの中産層の評価

デフォーと同様スミスにあっても、ピューリタンの中産層ないし彼ら出身の近代的企業家こそ、経済人としての営利活動つまり「財産(富)への道」が、そのまま「徳性への道」につながるものであり、そして彼らこそ新しい徳性としての勤勉、節約、慎慮などを生み出す存在であった。このことを大河内一男は以下のように言っている。「勤勉・節約をもって次第に自己の資本を蓄積しつつ社会的に興隆しはじめていた中産階級にあっては、営利活動は何ら軽蔑されるべきものではなく、むしろその内に宗教的な救いさえ見出すにいたったこと、すでにマックス・ウェーバーの

研究の指摘しているとおりであるが、スミスにおける営利活動の是認もまた同様な根柢の上に立つものであつた。<sup>①</sup>

これとは対照的に、上流の富裕層は豪奢な生活を送り、破倫に陥り易いために、貧困層は窮乏生活によつて経済人としての徳性を生み出すことは難しいと考えられていたこと、したがつて富裕層も貧困層も、「財産（富）への道」がそのまま「徳性への道」につながることはありえないと思われていたこと、先に述べたとおりである。

スミスは『道徳感情論』の中で、中産層のもつ徳性、生活態度、行動様式について以下のように述べている。

「中流および下流の、生活上の地位においては、徳性への道と財産への道、少なくともそういう地位にある人々が、獲得することを期待しても妥当であるような財産への道は、幸福なことに、たいていの場合、ほとんど同一である。すべての中流および下流の職業においては、真実で堅固な職業的諸能力が、慎慮、正義、不動、節制の行動と結合すれば、成功しそこなうことは、めつたにありえない。……そのうえ、中流および下流の、生活上の地位にある人々は、けつして法律を越えるに十分なほど偉くはありえず、法律は、少くとも正義の諸法則のうちの重要なものに対しては、ある種の尊敬をもつように、彼らを威圧するにちがいない。そのような人々の成功はまた、ほとんど常に、彼らの隣人と同輩との、好意と好評とに依存するし、かなり規則正しい行動がなければ、それらは、めつたに得られないのである。したがつて、正直は最良の方策だという昔からの諺は、このような境遇においては、ほとんど常に完全な真理として当て嵌まる。だから、このような境遇においては、われわれは一般に、かなりの程度の徳性があることを期待するのだし、社会の最良な道徳にとつて幸運にも、これらの境遇が、人類のうちのはるかに大きな部分のものなのである。」<sup>②</sup>

引用文に見られるように、中産層の生活状態にある人々について言えば、彼らの大多数にあつては、「財産（富）

への道」と「徳性への道」とは、たいていの場合、ほとんど一致している。慎慮、正義、節制などの諸徳性に基づいて、彼らが有している職業的諸能力を、たゆまず鍛え、發揮していくことこそが、彼らにあつては、その成功へのもつとも確実な道である。それによつて彼らは、「隣人や同輩の好意と好評」をも得ることになる、こうスマスは言うのだ。このように見てくると、デフォーと同様、スマスの中産層もピューリタンの倫理観を身につけていることが分かるであろう。水田洋は「マックス・ウェーバーによつて、資本主義の精神を生みだしたものとされた新教とくにピューリタニズムはスマスによつても、民衆（中産層——引用者）の宗教として高く評価された」と言っている。

梅津順一は「アダム・スマスの経済学の原点においては、人間行動は道徳感情にかかわらせて理解されるだけでなく、その倫理的資質はピューリタニズムの世俗内的禁欲の刻印を帯びていた」と言う。しかし水田洋が言うように「スマスの時代には、資本主義の精神は初期の宗教的性格をかなり失つて、職業における成功を神の道としてでなく、成功そのものとして、求めるようになっていたであろう。」<sup>⑤</sup>この点は留意する必要がある。

さて中産層とは対照的に、上流の富裕層にあつては、不幸にして事情は異なる。スマスによれば、富裕層の間では「成功と昇進」とは、中産層の間で重視される、前述の諸徳性や諸能力に依存しない。ここでは「へつらいと偽り」とが、賞賛に値する諸徳性と諸能力に対して優位を占める。<sup>⑥</sup>その成功と昇進は「理解力があり豊富な知識をもつた同等者たちの評価ではなく、無知高慢で誇り高い、上長者たちの気まぐれではかけた好意」<sup>⑦</sup>に依存しているからだ。「王侯たちの宮廷」や「上流の人々の応接室」といった「腐敗した社会」においては、「傲慢でくだらないへつらい者たち」が幅をきかせ、「戦士、政治家、哲学者、または立法者の、堅固で男性的な諸徳性」とか、「すべての偉大で畏怖すべき徳性」とかは、彼らにとつて「最大の軽蔑と嘲笑」すら受ける。<sup>⑧</sup>

問題は、これだけに留まらなくて、もっと大きな害悪を中産の市民層の人々に与えることになる。スミスは言う。スミスにあつては、「富裕な人々と上流の人々に感嘆し、したがって彼らを模倣する、われわれの性向のために」<sup>9</sup>、そこからもつと重大な新たな憂慮すべき道徳感情ないし倫理観の腐敗が発生してくることである。それは中産層がもつ、この模倣するという性向のために、彼らの間においてさえ、上層の富裕階級と同様の憂慮すべきモラル・ハザードがはびこつてくることである。彼らは、上流の富裕層の「流行の衣服」「流行の語体」などの生活様式を模倣し、いっそう悪いことには、上流層の行う悪徳悪行さえ、中産の市民層の心中では是認していないにもかかわらず、「富裕層を模倣し彼らに類似することを誇るのである。」<sup>10</sup> ロイ・ポーターが語っているように、この時期には「あらゆる面であつた。……この国の中流階級の人々は目上の人々のまねをしようと懸命であつた。」<sup>11</sup>

さらに悪いことには、「多くの貧乏人は富裕だと思われれることを誇りとし、……この羨望される境遇に到達するために、財産への志願者たちは余りもしばしば、徳性への道を放棄する。」<sup>12</sup> 貧困者たちにあつても「へつらいと偽り」とが、また「高慢と虚栄」とが、やがて「堅固で男性的な諸徳性」や「偉大で畏怖すべき諸徳性」に代つてその地位を占めるようになる。上流の富裕層のみならず、社会の屋台骨を背負つて立つ中産層の人々の間にさえ起こりうる、こうしたさまざまな道徳感情ないし倫理観の腐敗の危険性にスミスは警鐘を鳴らすのである。

道徳感情ないし倫理観の腐敗ゆえに、中産層の経済人としての新しい徳性つまり慎慮、勤勉、節約といった倫理的資質が涵養しえず、その結果、経済的視点つまり経済発展に必要な資本蓄積とそれに基づく国民的富裕の達成は樂觀的に進行しえず、さまざまな障害や抵抗に遭遇せざるをえないことになる。<sup>13</sup> モラル・ハザードがあれば、中産層の新しい徳性つまり勤勉、節約といった資本主義の精神が涵養されず、その結果、国民的富裕の社会の実現は不可能にな

り、したがって「政治経済学は、国民と主権者の双方をとともに富ませることを意図している」<sup>14</sup>にもかかわらず、富裕の達成を実現できないことにもなりかねない。

ところで、経済発展に必要な資本蓄積に関して言えば、スミスにあっては、貯蓄の主要な主体をどこに見たかと言うことが重要になってくる。スミスは一方において「勤勉ではなく節約が、資本増加の直接の原因である。なるほど勤勉は節約によって蓄積される対象物を提供する。だが、勤勉によってどれだけ多くが獲得されようと、もし節約がそれを貯蓄し貯蔵することがなかつたら、資本はけつして大きくはならないだろう」<sup>15</sup>と言つて、貯蓄の主体が、勤勉の主体にもなりうる雇用生産的労働者ではないことを暗示している。他方において、富裕な上流層は「怠惰な客人や家事使用人」<sup>16</sup>に支出し、高い利潤をむさぼる大貿易商人は「節約という真面目な美德」<sup>17</sup>をことごとく破壊させる傾向が強いることが指摘される。つまりスミスが、節約を実践し、貯蓄の主体となる典型的な階層として考えていたのは、中産層に属する人々であつたと言える。<sup>18</sup>

別言すれば、スミスが『国富論』で強く主張した、「個人が自己の境遇の改善をめざす営々として行ふ努力」<sup>19</sup>こそ、経済発展に必要な資本蓄積とそれに基づく国民的富裕の社会をめざす推進力なのであるが、この推進力の担い手が、中産層に属する人々であつた。こうして見てくると、デフォォーのみならずスミスにあっては、中産層の人々への評価は高く、信頼も厚く、これから到来する本格的なイギリスの産業社会にとって必要な人材として、その成熟を期待した人々であつた。そして、この中産層の人々の繁栄によってイギリス経済のさらに輝かしい将来がもたらされるであろうと考へていたのである。<sup>20</sup>

- (1) 大河内一男『スマスヒリスト』(『大河内一男著作集』第三卷) 青林書院新社、一九七〇年、一〇三頁。
- (2) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D.D.Raphael and A.L.Macfie, Glasgow edition, Oxford, 1976, p.63.  
(以下、*TMS*と略記) 水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房、一九八一年、九六―七頁。
- (3) 水田洋『アダム・スマス研究』未来社、一九七五年、一九三頁。
- (4) 梅津順一『近代経済人の宗教的根源』、二四四―五頁。
- (5) 水田洋、前掲書、一九三―四頁。
- (6) *TMS*, p.63. 邦訳、九七頁。
- (7) *TMS*, p.63. 邦訳、九七頁。
- (8) *TMS*, p.63. 邦訳、九七頁。
- (9) *TMS*, p.64. 邦訳、九八頁。
- (10) *TMS*, p.64. 邦訳、九八頁。
- (11) ロイ・ポーター、前掲訳書、一〇七頁。
- (12) *TMS*, p.64. 邦訳、九八頁。
- (13) 川島信義「アダム・スマス『諸国民の富』の成立と『道徳感情の理論』の改訂」『経済学論集』第一六巻第三号、西南学院大学をみよ。
- (14) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R.H.Campbell, A.S.Skinner, Glasgow edition, Oxford, 1976, Vol.I, p.428. (以下、*WN*と略記) 大河内一男監訳『国富論』中央公論社、II、七五頁。
- (15) *WN*.I, p.337. 邦訳、I、五二八―九頁。
- (16) *WN*.I, p.338. 邦訳、I、五二九頁。
- (17) *WN*.II, p.612. 邦訳、II、三八一頁。
- (18) 岡田純一『アダム・スマス』日本経済新聞社、昭和五二年、一六八頁。

(19) W.N.I, p.343. 邦訳、I、五三六頁。

(20) 大塚久雄、前掲書、三七頁。

## 六 結びにかえて

今まで論じてきたところから分かるように、一七世紀後半から一八世紀半ば前後の時期、いわば産業革命前夜の時期は、社会現象として見れば、新しい社会層である中産層の台頭とその社会的地位の上昇の時代であった。

「イギリス社会の背骨」と言われるまでに成長していた、この新興の中産層の立場に立ち、彼らの革新性を評価し、その役割に期待をかけていた人物にデフォーと少し後にスマスがいた。他国に比べてイギリスは、中産層が非常に繁栄していることを高く評価し、こういう中産の市民層こそが、今イギリスの国富をその双肩に担っている中堅なのだ<sup>①</sup>と確信していたのであった。そして彼らは、この中産層こそ、将来のイギリスの繁栄を支える最強の支柱であると考<sup>②</sup>えていた。

資本主義の精神をもつ経済人としての中産層の人々は、産業革命という経済発展の基盤となった社会的・文化的・倫理的な諸変化、たとえば封建社会にあつては価値の低い下賤なものと見られていた利潤動機、競争倫理などを積極的に是認する心性、その上利己心から生ずる慎慮、勤勉、節約といった新しい徳性を身につけていた。それに加えてデフォーもスマスも、ピューリタンの教義で育った中産層の人々を通じてなされる営利活動Ⅱ「財産への道」のみが、そのまま「徳性への道」につながるものであり、さらに中産層および勤労大衆層（労働者層）の健全な消費行動が、

国内の消費市場を形成するものであった。

中産層とは対照的に、上流の富裕層の行動は、主として浪費そのもの、そして背徳と退廃とにだけ結びつくことを特徴とするので、国民大衆の富裕をもたらす資本の蓄積につながることなど望むべくもなかった。一方貧困層は、窮乏生活によって経済人としての徳性を生み出すことは難しいと考えられた。

ピューリタンの牧師リチャード・バクスターが説いた経済倫理とピューリタンとしての教義を身につけた中産層こそが、禁欲・勤勉・節約・資本蓄積に全力を注ぐ資本主義の精神を發揮し、国民的富裕も成し遂げ、来るべき産業革命を順調に達成しうるであろう。このように考えたデフォールとスミスは、新興の中産層の人々にイギリスの未来を託したと言つて過言ではない。まさに中産層の立場に立つて来るべきイギリス社会を見据え、イギリスの国益にとつて的確な判断を人々に示した人物こそ、デフォールとスミスであったと言えるであろう。<sup>③</sup>

(1) デフォール『イギリス経済の構図』、前掲訳書、解説、四一〇頁をみよ。

(2) 関口尚志、前掲論文、二八頁。

(3) 大塚久雄、前掲書、三七頁。

